

発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの問題意識

広汎性発達障害に対しては、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつあり、心理療法的アプローチは適さないとの見方もある。しかし、心理臨床の現場からは、発達障害についても心理療法の有効性が主張され、2000年代以降も多くの成功例が報告されている。それを受けて、われわれは「発達障害への心理療法的アプローチ」プロジェクトを立ち上げ、主に事例検討から、有効な心理療法のエッセンスを捉えてきた。そして、イメージや遊びの構造的変化に着目するなど、象徴解釈とは異なる視点からクライアントを捉え、「主体の発生」に立ち会う心理療法が有効であることを確認した（河合，2010）。このような観点は、これまで臨床事例研究という方法で専門家に発信される場合が多く、社会的関心が高まった現在においても、発達障害への心理療法の有効性が広く理解されているとは言いがたい。

これに対して本プロジェクトは、医学研究科・十一元三教授と連携し、神経生理学的視点と心理学的視点を協働させて、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を実証的に明らかにする調査研究を開始している。実践に基づきながら、これまで不足していた定量的知見を提示することで、より広範囲に心理療法の意義を発信し、発達障害への援助体制の確立に貢献できると考えている。

■発達障害の子どもへのプレイセラピーの実践と研究

当センターのプレイルームにて、発達障害の子どもを対象に、プレイセラピーの実践と研究を行っている。これは、6カ月間プレイセラピーを行い、（1）プレイセラピーの前後で子どもにどのような変化が生じるのか、（2）

発達障害の子どもと非発達障害の子どもとでは、プレイセラピーのポイントはどのように異なるのか、という2つの観点から、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を検証しようとするものである。

本研究は、訓練をうけた専門家・大学院生によりプレイセラピーが行われるため、研究自体が実践・サポートであり、同時にそれが実証研究のデザインによって強化されていくところに大きな特色がある。

平成23年度までに、11名の子どもを受け入れている。

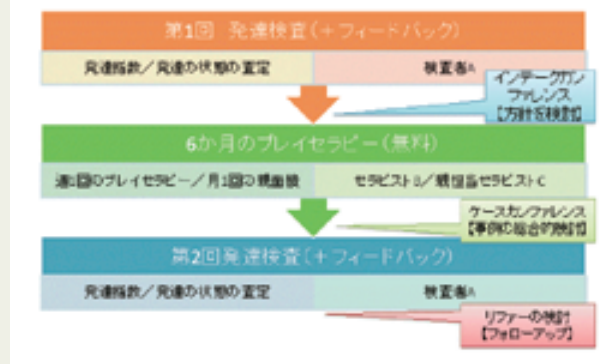
■予備的研究から

これまでの予備的研究から、以下のような知見を得ている。

（1）発達指数とプレイセラピーのプロセスの検討

6カ月間のプレイセラピーを経て、子どもの発達にどのような変化が見られるのか、新版K式発達検査を用いて検討している。また、事例検討によってプレイセラピーのプロセスを細やかに検討することで、定量的には測れない変化を拾い上げようと試みている。プロセスの検討からは、セラピーのなかでの i) 分離にまつわる不安の現れ、ii) 二者関係における拒否／つながりの成立、iii) 遊びに現れる融合と分離の契機、iv) 遊びに現れる高さ・噴出の契機、といった遊びの構造的変化に着目することがポイントとして浮かび上がってきた。今後は、K式発達検査による発達指標のどの側面にどのような変化が見られるのか、プレイセラピー

研究の枠組み



ーのプロセスとの関連から、より具体的に明らかにする必要があるだろう。

（2）非発達障害の子どもとの比較

発達障害と判断されてプレイセラピーに紹介されてくる事例のなかに、セラピーや保護者面接の経過から、非発達障害児と考えられる子どもが複数例見られた。社会的関心の高まりとともに、コミュニケーションの難しさなど表面に現れてくる問題から、そうではないのに、発達障害と判断される事例が増えている印象を受ける。発達障害と非発達障害の事例を比較することで、呈している問題の背景にある発達障害の本質を明らかにしていくことが必要と考えられた。

■今後の展開

今後は、予備的研究で得られた視点を基盤に、受け入れ事例を増やして、数量的・質的な検討を行っていく。発達障害へのプレイセラピーの効果が多面的に測定され、また、それが多くの事例に裏付けされて提示されることで、どのようなタイプの発達障害に対して、どのようなプレイセラピーが有効であるかが明らかになるだろう。本研究で得られた知見を、セミナー等で広く公開することで、学校や家庭などさまざまな場面で、発達障害の子どもへの関わり方にヒントを提供することができるのではないだろうか。